

インドネシア語専攻 地域基礎Ⅰ 2008 年度冬休みレポート課題

- ・ レポート題目：「森林のアブラヤシ農園化の問題」
 - ・ 課題告知日： 2008 年 12 月 19 日(金)
 - ・ 提出日： 2009 年 01 月 23 日(金)授業時間中
 - ・ 形式の注意：
 - ・ A4 判、横書き。Microsoft Word で作成し、プリントアウトしたものを推奨。
 - ・ 表紙には、レポート題目「森林のアブラヤシ農園化の問題」、授業科目名「地域基礎Ⅰ インドネシア研究入門」、氏名、学生番号を明記。
 - ・ 本文は、1 枚以上 3 枚以内。2 枚以上ある場合には、本文にページ番号を明記。表紙と合わせて、左上をホッチキスでとめる。
 - ・ 課題：
 - ・ 添付資料「森林が農園になるまで」を読んで、以下のポイントを踏まえて、レポートを作成しなさい。適宜、添付資料以外の資料を使用することが必要である。
 - ① アブラヤシとはどのような作物か？どのような商業的用途があるのか？
 - ② 森林がアブラヤシ農園に転換される速度はどのようなものか？また、なぜそのような転換が進んでいる理由は何か？
 - ③ 森林のアブラヤシ農園化はどのような問題を引き起こしているのか？環境と社会の両面から答えなさい。
 - ④ アブラヤシと日本とはどのような関係があるか？そして、私たち日本人はどのような行動をとることができるか？
 - ・ レポート本文は、上記のポイントにあわせて、いくつかの節に分け(必ずしもポイントの番号に合わせる必要はない)、節ごとに見出しをつけること。
 - ・ レポート本文の各パラグラフは、1 行目を少しさげること。
 - ・ レポートの最後には、参考にしたすべての文献(ウェブサイトを含む)の目録をつけること。目録の前に「参考文献目録」という見出しをつけること。文献目録の形式は次を参照：

http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/aoyama/2006/11/post_19.html
- なお、少なくとも、以下の文献は記載すること。
- 林田秀樹. 2008. 「森林が農園になるまえに～アブラヤシ農園面積拡大の実態と問題点」『インドネシア ニュースレター』61: 54-57.

森林が農園になるまえに ～アブラヤシ農園面積拡大の実態と問題点

林田秀樹（同志社大学教員）

ここでは、インドネシアにおけるアブラヤシ農園面積の拡大という事態をどうとらえるべきかについて考えるとともに、そうした事態が、地域別に見て、あるいは農園の所有形態の点でどのような態様をもって進んでいるのかを公式データで確認し、見過ごされがちな問題点について考えてみることにしたい。

再生不可能な森林にはたらく諸力

インドネシアには、‘Nasi sudah menjadi bubur.’ という諺がある。直訳すると「ご飯はもうお粥になってしまった」となるが、その含むところは「もう手遅れだ」という意味だ¹。一旦起きてしまったこと、起こしてしまったことの不可逆性を論ずる譬えである。譬えだから字面にこだわることにはナンセンスかもしれないが、これにあえて次のような別の譬えを対比してみれば、ここで取上げようとするアブラヤシ農園面積の拡大が抱える問題の性質をある程度浮き彫りにできるのではないだろうか。

ここでの問題になぞらえれば、上のフレーズは差し詰め、‘Hutan sudah menjadi perkebunan.’、「森はもう農園になってしまった」という表現になるだろう。Nasi（ご飯）が Bubur（お粥）となり、Hutan（森林）が Perkebunan（農園）となるのは同様に不可逆な変化であるが、これら2つの事態には決定的な違いがある。Nasi と Hutan の再生（産）の可能性である。

Nasi を再び得ようと思えば、また米から炊き直せばよいし、米がなければ新たに買うか再びつくればよい。しかし、Hutan の場合はそうはい

1. 井上治、カブール・プリハティン『インドネシア語基本動詞の使い方』LK BIBA、2003年、p. 38を参照。

かない。一度森林の木々を伐採し、跡地を焼いて農園にしてしまえば、二度と再び同じ森林を同じ土地にあらしめることはできない。少なくとも現時点では、限りなく困難である。莫大な費用を投じて植林を行い農園から森林への再転換を図ったとしても、同じ生態系を再現することは不可能だろう。Hutan はそれこそ、Nasi とは違って人為を介さず生成された、有限かつ再生が不可能な、もしくは極めて困難な資源なのである。

Nasi を Bubur とすることも、Hutan を Perkebunan とすることも、人為であるという点では同じである。しかし、上の2つのフレーズにあるもう1つの決定的な違いは、当該事態をもたらす人為の性質にある。

ご飯からお粥をつくるという行為は、当のご飯の所有者の、所有物であるそのご飯に対する、消費者としてのごく個人的な事情や好みに基づく営みである。ご飯は自分の所有物であるから、当該消費者がどう処分しようとする自由なのだ。これに対して、森林をアブラヤシ農園にするについては、森林の所有（占有）権とその移転についての法制度上の問題を残しつつ²、実に様々な立場の人々の様々な欲求や思惑が動因となっている。登場する利害関係者として、主要なものだけでも農園企業、農園・CPO（Crude Palm Oil＝パーム油）工場で契約農民・労働者として職に就くことを望んでいる（潜在的）失業者、CPOを中間財に用いる川下部門の企業、CPOを用いてつくられた最終消費財を国内外で需要する消費者が一方にあって農園面積拡大の推進要因となり、他方で森林の農園化によって不利益を被る者として、農園化の対象地域とその周辺に住む現地住民、森林消失に伴う環境破壊で影響を被る世界中の人々らがいて、プレーキの役割を果たしている。中央・地方政府の関係部局・官僚は、本来中立的な立場にあるべきはずであるが、事実上農園化を促進する役割を果たしている。利害関係者の顔ぶれをみれば、農園化で利益を享受する立場にありながら同時に被害を受ける人もいることがわかる。これらの諸力がぶつかり合いながら、現時点では農園面積を拡大する方向に力学のベクトルが大きくはたらいっている。

2. 本誌の前号、No. 63で組まれた特集に収録のノルマン・ジワン氏の講演記録「インドネシアのアブラヤシ産業をめぐる問題」、及びアンディコ氏の講演記録「インドネシアの天然資源管理に係わる法的側面からの考察」を参照。

どこでどれほど広がっているか

さて、それではアブラヤシ農園面積拡大に向くそのベクトルはどのような有り様で推移してきたのか。この点について、公式統計で確認しておこう。

インドネシアのアブラヤシ農園面積と地域ブロック別シェアの推移 (%)

年	農園面積 (ha)	ジャワ	スマトラ	カリマンタン	スラウェシ	その他	計
1995	2,024,986	0.7	81.9	13.8	2.9	0.7	100
1998	3,559,195	0.5	78.0	17.6	3.0	0.9	100
2001	4,713,433	0.4	77.0	18.7	2.8	1.1	100
2004	5,401,581	0.5	76.9	19.3	2.4	1.0	100
2006*	6,074,926	0.5	75.4	20.9	2.2	1.0	100

(出所) Direktorat Jenderal Perkebunan, Departemen Pertanian, *Statistik Perkebunan Indonesia: Kelapa Sawit*, various issues; BPS, *Statistik Kelapa Sawit Indonesia 2004, 2005* より作成。

* 速報値。

この表から観察される第1の事実は、農園面積の急速な拡大ぶりである。1995年には約200万haであったのが、11年間でほぼ3倍に増加し600万haを超えている³。2006年時点の面積は、インドネシアの国土面積(約1億8,600万ha)のおよそ3.3%、日本のそれ(約3,800万ha)の約16%であり、この間の400万ha以上にも及ぶ拡大面積については、同様にそれぞれ、約2.2%、約10.7%となる。その絶対的な広さと急伸長ぶりが窺がえる。インドネシアの2006年時点での多年生作物の農園総面積は、約1,800万haで同国国土面積の10%弱であるが、アブラヤシ農園面積はそのうち約3分の1を占め、作物種別農園面積では約20%で第2位のココヤシ農園を大きく引離して第1位のシェアとなっている。

第2に観察されるのは、ジャワのシェアは無視できるほど小さく、ほとんど全てのアブラヤシ農園がそれ以外の地方島嶼部につくられている

3. 前掲のノルマン・ジワン氏の講演記録で紹介されているところでは、2007年上半期の時点でインドネシアのアブラヤシ農園面積は728万haであるとのことである。これと上表で示した2006年の値とは100万ha以上の隔たりがあり、1年間の拡大面積としては大き過ぎる感があるが、前者はノルマン氏所属のNGO、Sawit Watchの独自の集計によるものと思われる。

という事実である。これは、地方島嶼部の方が農園候補地となる森林をより広くもつことの表れであるが、中央・地方間に小さくない経済発展格差を抱えるインドネシアにあって、格差解消の手段としてもアブラヤシ農園開発が各方面から関心を引く理由となっている。

第3に窺えるのは、地方島嶼部のなかでもスマトラのシェアが最大で、2006年時点でも4分の3を超えているが、近年カリマンタンのシェアの伸長が著しいという点である。1995年におけるカリマンタン地域のアブラヤシ農園面積は約28万ha、2006年のそれは約127万haだから、わずか10年弱で4.5倍の増加となる。これは、同地域において民営農園企業の経営になる農園面積が1995年の約10万haから2006年には約77万haへと増大したことにその要因の多くを負っている。カリマンタンにアブラヤシ農園面積拡大のフロンティアが移ってきていることをこの事実は示している。その主たる担い手が民営農園企業であり、民営大農園(perkebunan besar swasta)に限ってみると、2006年で274万haのうちカリマンタンが28.2%のシェアを占めている⁴。

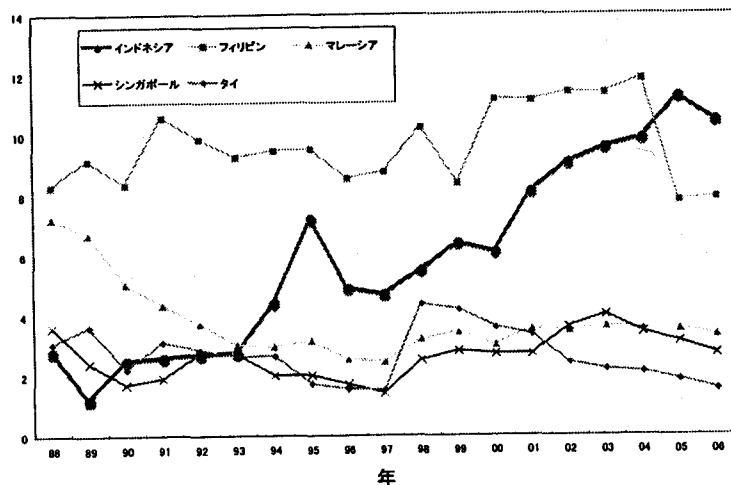
見過ごされがちな問題

上述のように急激な農園面積の拡大を招いた要因として、今まで取り上げられることが多かったのは、農園企業の利潤追求・事業優先の振舞いや、政府の法制度整備及びその施行についての矛盾や不徹底、あるいは積極的な農園拡大政策、加工業者の開示情報の不足、消費者の購入商品選択に当たっての浅慮や知識不足などではないだろうか。前述した森林の農園化の推進要因の1つとして、「農園・CPO工場で契約農民・労働者として職に就くことを望んでいる(潜在的)失業者」を挙げたが、こうした人々

4. 他の所有形態別のカテゴリーとしては、国営大農園(perkebunan besar negara)及び小自作農園(perkebunan rakyat)がある。2006年時点における前者の面積は約70万ha、後者のそれは約264万haとなっている。小自作農園とは、いわゆるPIR(Perusahaan Inti Rakyat)方式により国営もしくは民営の中核農園(Inti)と併設されるかたちでその周辺に造成されるもので、契約農民(petani plasma)すなわち小自作農(rakyat)の所有とされる農園である。なお、PIR方式について詳しくは、岡本幸江「アブラヤシが奪う暮らしと森」(JANNI『アブラヤシ・プランテーション 開発の影—インドネシアとマレーシアで何が起きているか—』第5章)を参照。

の存在は、農園化を促す要因として見過ごされがちであったように思われる。2006年の失業者数は、顕在化しているだけでもインドネシア全体で約1,093万人、失業率は10.28%となっており、近年ASEAN原加盟5カ国(ASEAN5)のなかでも群を抜いている(図参照)。これに、都市雑業等の不安定な就労先で働いている潜在的な失業者を加えれば、さらにインドネシアの労働市場の深刻さが顕わになるだろう⁵。

ASEAN 5の失業率



(出所) ADB, Statistical Database System, シンガポールについてのみ、WB, World Development Indicators Online; Singapore Government, Statistics Singapore, より作成。

もちろん、これらの人々全てが、どうしてもアブラヤシ農園で働きたいと考えているとは限らない。しかしながら、上述のような状況の下で、それら(半)失業状態にある人々に対してアブラヤシ農園並びにCPO工場から契約農民・労働者の募集が行われれば、少なくない人々がそれに

5. 例えば2007年9月、アブラヤシ農園調査のために訪れた西カリマンタン州の州都ポンティアナックで、農園をご案内していただくなどお世話になったタンジュンブラ大学シャリフ・イブラヒム・アルカドゥリ教授から筆者が聞いた話では、現地に住む者の実感として、同州の失業率は20%を下らないだろうとのことであった。因みに、同州の2006年の顕在失業率は8.53%である(BPS, Statistik Indonesia 2007)。

応ずることになるだろう。総数としてどれほどの人々がアブラヤシ農園やCPO工場で働いているかについては系統的に統計がとられていないようだが、筆者が試算したところでは、2003年時点で少なくとも260万人がそれらの就労先に職を得ているという結果を得た⁶。前掲の2006年の顕在失業者数の約4分の1という、相当の規模である。農園の開発予定地に住み続け慣習的に森林を利用し続けてきた現地住民の権利が侵害されているかどうかについて、失業中の人々が正確な情報を得ることはおそらく難しいだろうし、農園企業が当該予定地の事業利用権(HGU)については解決済みだといえ、それを信じて募集に応じるだろう。果たして、こうした行為を私たちは責められるだろうか。むしろ、それらの人々が再び失業者となり新たな農園開発の推進要因とならないためにも、彼らにより良い条件で働けるような措置を農園企業が講じているかどうかを注視する必要がある。

いずれにせよ、赤道を挟んでインドネシアの国土が位置している地理的条件(アブラヤシの生育のためには必須条件)や、インドや中国、EU加盟諸国などにおけるCPO製品への需要の高まりなどのほかに、土地や労働といった生産要素の賦存状況において、農園拡大への「好条件」がインドネシアには揃い過ぎるくらい揃ってしまっているのだ。そのなかで、そうした事態の進行を押しとどめるのは容易なことではない。

どうすればよいか

初めに取上げた2つの譬えがもつ含意の異同の話に戻ろう。

2つのフレーズでは、当該の事態をめぐっての当事者意識の様相が相当異なる。Nasi(ご飯)の所有者は、まさに排他的な当事者として、それをお粥にしてしまった後に思い返し「ご飯のまま食べればよかった」と自分の行為を後悔することになる。しかし、'Hutan sudah menjadi perkebunan' というフレーズが示す事態においては、利害関係者ごとにとらえ方はまちまちだろう。最も当事者意識をもって当該事態をとらえ

6. 拙稿「インドネシアにおけるアブラヤシ農園開発と労働力受容—1990年代半ば以降の全国的動向と北スマトラ・東カリマンタンの事例から—」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)第79号、2007年10月を参照。

るのは、慣習的土地利用権をなくしてしまった現地の人々と、将来の収益見込みに基づいて農園開発に関わる投資決定を行う企業であろう。現地住民は「もう手遅れだ」と憤怒し、企業は企業で「もう手遅れだ」と制定法を盾に現地の人々に主張する。関心のない消費者は「へえ…」としかいいようがないかもしれないし、環境問題に関心をもつ市民は残念に思うだろう。そのとらえ方の違いは、「もう手遅れだ」という事後的な態度 (sikap sesudah...) だけでなく、「手遅れになる前に」(現地住民や関心をもつ市民の側) もしくは「手遅れだといえるのだから」(農園企業の側) といった事前的な態度 (sikap sebelum...) をも決定することになる。

では、事前的に (Sebelum dijadikan hutan sebagai perkebunan, ...) どうすればよいのか。

本稿をお読みの読者は、大方が環境問題に、しかもインドネシアにおけるそれにご関心をおもちだろう。そうした立場から、またCPOを用いた製品の消費者としての立場からも、本誌前号でアンディコ氏が提唱しているように、現地住民との間で紛争を生じている企業の製品を買わないための方法を研究してみることも一法だと思う。違法な森林伐採を防止するための木材トレーサビリティ・システムが日本インドネシア間で共同開発され、この4月から実用化に向けた動きが始まっているが⁷、CPOの場合それに倣ったシステムをつくるのが可能かどうか、といったことがその際の研究課題となる。そのほか、インドネシアの中央・地方政府に対して、農園開発に際しての現地住民・企業間のインフォームド・コンセントと計画・規制を自ら実施させるための監視と発言において、NGOの果たす役割は大きい。資本を所有し投資決定を行う企業とその監視役である政府へのプレッシャーは、何より重要である。

私は私で、労働・失業問題に関心がある。アブラヤシ農園面積の拡大によらずに就労機会を増大させる方法はないものだろうか。まだまだ漠然としたイメージの域を出ないが、既存のアブラヤシ農園に対しては、単位面積当たりの生産量が一定の基準に達しなければより高い税率を

7. 「日本経済新聞」2008年4月22日付。

適用するなどして生産性向上を促し、農園の拡張欲求を極力抑制する方法をとるとともに、そうした土地生産性向上のために追加的な労働力の雇用を促進するなどの方法はあるかないか、といったテーマに関心がある。またもちろん、CPOの下流部門に位置するより高次の加工を行う製造業を振興することで、前方連関的な産業の発展を促し、雇用を増大させるためのよい方法はないか、といったことなども考えてみたいと思っている。以上のように私の場合は、事後的 (Sesudah hutan dijadikan sebagai perkebunan, ...) にどうするかというテーマなのかもしれない。しかしそれが、事前的に新たなアブラヤシ農園の拡張を抑制し、さらなる森林喪失の未然防止に役立つのではないかと考えている。buburもまだ食べられるし、perkebunanだって使えるのだ。私は、「もう手遅れだ」とは思っていない。ただし、父祖伝来の土地を奪われて「もう手遅れだ」と思って落胆しておられる現地の方々の思いをないがしろにしてよいとも思っていない。